

令和3年度
第35回 少年の主張甘楽町大会

発表文集



甘楽町教育委員会

目次

(敬称略)

ページ

◆最優秀賞

・ 食べ物に感謝する	甘楽町立甘楽中学校一年	森田望花	1
・ 自分らしくを大切に	甘楽町立甘楽中学校二年	町田のほら	3
・ AI	甘楽町立甘楽中学校三年	浦辺惟愛	6

◆優秀賞

・ 礼儀のかけ算	甘楽町立甘楽中学校一年	井上海翔	8
・ 今、起きている問題	甘楽町立甘楽中学校一年	杉山侑輝	11
・ あなたは毎日をどう過ごす	甘楽町立甘楽中学校二年	大類亨介	13
・ 笑顔が教えてくれたこと	甘楽町立甘楽中学校二年	堀口杏	15
・ 本の魅力	甘楽町立甘楽中学校三年	青木柚月	17
・ 主張するために大切なこと	甘楽町立甘楽中学校三年	岩井唯花	19
・ 仲間と過ごした「貴重な時間」	甘楽町立甘楽中学校三年	金井俐樹	21

*原文のまま、各賞ごと学年順に掲載しています

食べ物に感謝する

甘楽町甘楽中学校

一年 森田 望花

「残飯」

私はこの言葉が嫌いです。

皆さんは残飯という言葉にどんな印象をもっていますか。私が「残飯」を初めて知ったのは小学校二年生の時です。給食の準備をしていた際に「残飯をなくそう」というポスターを見かけました。「残飯」って何だろう。家に帰って母に聞くと、「残ったご飯のことだよ。」「えっ、ご飯が残ると名前が変わって捨てられちゃうの。」そこで初めて、ご飯が残るとゴミになるということを知りました。それから、給食で残ったご飯を見るたびに、このご飯は捨てられてしまうのだと思うと、何とも言えない暗く、嫌な気持ちになりました。

近年、「残飯」という言葉のみならず、「フードロス」や「廃棄食品」といった言葉もよく耳にしますが、「残飯」とは食べきらずに残された食事のことです。さっきまでおいしく食べていた物なのに、残すとなったその瞬間、「残飯」というものになってしまうのです。残飯の行く末を調べると、一部は家畜などの飼料や作物を栽培する際に使用される肥料となりますが、ほとんどが生ごみなどと一緒に焼却処分されます。食べ物がごみとなってしまふのです。なんと悲しいことでしょうか。

その捨てられている物が食べ物となる前は、もともと命だったのです。私が食べ物は命だと感じたのは、うずらの飼育がきっかけです。卵を孵卵器に入れ、孵化させました。卵の殻を小さなくちばしできれいに丸く割り、中からヒナが出てきたその瞬間は今でも忘れられません。そして、産毛からだんだん羽へと生え変わり、大人のうずらになりました。「いつになったら卵を産むのだろう。」「もうすぐ卵を産むかな。」と毎日毎日一生懸命世話をしました。そしてある日、つ

いにくらすが卵を産んだのです。その卵はまだ温かく、小さな卵に命を感じました。私はうずらが産んでくれた、大事な大事なたった一つの卵をありがたくいただきました。その卵を食べたときに、命ってつながっているのだと実感しました。

さらに、命をいただいていると実感したのは、社会科で「トレーサビリティ」について学習した時です。トレーサビリティとは、食べ物の生産から消費までを調べることができる仕組みです。どこで生まれて、どこで育ち、いつ殺されてお肉になったのかを知ることができません。その後私は、牛肉を買った際に、パックに書かれている牛の個体識別番号を検索してみました。すると、私が食べた牛肉は、まだ二才半のメス牛でした。その牛は、北海道で生まれ、その後群馬県前橋市で育ち、玉村町で屠畜された牛であることがわかりました。私はその情報を知った時、この牛の命をいただいたのだと実感しました。そして、「ありがとう。」という思いと、「いただきます。」の本当の意味に気づきました。

私は、皆さんに伝えたいことがあります。それは、「残飯」という言葉が必要のなくなるくらい食べ物を大切にしたいということ。食べ物が豊かな日本だからこそ、食べ物を大切にすべきだと思います。食べ物には命があります。私たちと同じように、生きていた命をいただいています。そのことに感謝の気持ちをもつべきです。また、食べ物が私たちの元に届くまでには、たくさんの人がたずさわっています。日頃から、食事を簡単に入手することができる環境にある私たちは、食べ物の大切さを実感しづらい状況にあります。しかし、食べ物に対する感謝の気持ちを決して忘れてはいけません。私たちは、命をいただいているのです。

食べ物を大切にしようという意識がより高まれば、食品ロス問題の改善にもつながります。私だけでは小さな一歩。しかし、みんなが協力すれば大きな一歩となります。

いつの日か、私の嫌いな「残飯」という言葉がなくなる日を信じて。

自分らしくを大切に

甘楽町甘楽中学校

二年 町田 のはら

先日、町の広報の中で、役場の組織図を見ました。

それを見たとき、私は素朴な疑問を持ちました。課長さんは、男性ばかり。役場にはたくさんの方がいるのに。そんなときに、ジェンダーギャップという言葉を知り、興味を持ちました。

みなさんは、「ジェンダーギャップ」という言葉を聞いたことがありますか？日本は世界の先進国の中でも、「ジェンダーギャップ指数」が、百五十三カ国の中でも百二十位と、最下位に近いそうです。ジェンダーギャップとは、女性の政治参加度・女性管理職の数、家庭における女性の負担の多さなどの、男女格差のことです。

私自身、生まれてからの人生の中で「女だから」、
「男だから」という差を感じたことは一度もありません。クラス会長をやったこともあり、運動会の団長をしたこともあります。集団をまとめるのは、とてもやりがいのあることで、そこに「女だから」、「女なのに」という思いはありませんでした。それもそのはず、教育分野でのジェンダーギャップ指数が九十二位と、日本は比較的上位にいるからです。

また、甘楽中では、今年から女子のズボンが認められました。長い間当たり前になっていた、女子はスカート、男子はズボンという考え方に、変化が見られたのです。それは、生徒会が中心となって多様性について話し合ったからだだと思います。誰もが自分らしく、自由に生きられる、そんな日常生活を送ることができれば、幸せだと思います。

しかし、現実はどうでしょうか。周りを見てみると、まだまだそこには「格差」「ジェンダーギャップ」が存在しています。全国的に見ても女子のズボンは少数派です。生徒会長の女子の割合は男子に比べると少な

いというデータもあります。大人の場合だと、結婚や出産で仕事を辞める女性が多くいます。私はそこに、大きな問題があると思います。せっかく男女格差のない平等な教育を受けてきたのに、大人になるにつれて格差が出てきてしまうのはおかしいし、もったいないことだと思います。

私の母は仕事をしています。帰ってくるのは父と同じか、それよりも遅いです。出張で何日も家にいないこともあります。私にとっては当たり前前のことでしたが、周りには、そのような母親を持つ人が少ないように感じます。授業参観や検診に父が来たこともありました。洗濯物を父が干したり、ご飯の準備をしたりと、二人が同じように家事をしています。また、二人とも帰りが遅いときには、祖父母が私の面倒を見てくれます。私の周りには、そういった環境が整っていません。もし、祖父母が近くにいなかったら、私はどうなっていたのでしょうか。誰が私の面倒を見てくれたのでしょうか。おそらく一人でじっと親の帰りを待っていたのだと思います。このような状態にならないよう

に、周りの母親たちは仕事を辞めざるをえなかったと気づきました。

「環境」これがキーワードだと考えます。私たちが今まで男女平等に育ってきたように、これからもずっとこの環境が続けば、女性でも仕事をしやすく、また、子育てや家事などもしやすくなると思います。せっかく中学生という今、ジェンダーギャップや多様性について考えるきっかけをもらったので、これを将来へつなげていきたいです。自分が大人になったとき、この町がもっと住みやすくなるためには、女性目線の制度やルールがある環境が大切だと思います。

私が考えるルールは、「仕事は五時まで。残業なし。」そうすれば、仕事が終わってすぐに母親は子供を保育園に迎えに行くことができます。全員が五時までなので、後ろめたい気持ちにならないで済みます。このルールは、女性だけでなく、男性にも当然適応されます。母親が保育園に子供を迎えに行ったり買い物をしたりしているうちに、家で夕食の支度をしたり、その他の家事をしたりと、それぞれの家庭で役割分担をするこ

とができます。仕事も家事も平等です。

古くからある「男だから」「女だから」という考えを変えて、「自分だから」「自分らしく」を大切にできる社会にしていきたいです。そのためにはみなさんの協力が必要になります。いつか日本でもジェンダーギャップ指数が平等になるように、私たちから、意識改革をしていきましょう。

A I

甘楽町甘楽中学校

三年 浦辺 惟愛

ここ数年で、A Iは私達のすごく身近なものになりました。お掃除ロボット「ルンバ」などが良い例です。確かにA Iが使われている商品にはとても便利なものが多いなど私も日々感じています。しかし、その一方で「二〇四五年問題」というものが今、注目されています。

二〇四五年問題とは、A Iの性能が二〇四五年に人類の知能を超える、と予測されている問題のことです。今、世界ではそれを歓迎すると思っている人もいます。しかし私はこれを初めて聞いたとき、恐怖を感じました。A Iが事件などに悪用されてしまう機会が増えるのではないかと思ったからです。まだ日本では、A Iが悪用されたという事件は耳にしません。

海外ではA Iを利用した振り込め詐欺により、日本円にして約二千六百万円奪われたという事件も起こっています。それに加え、A Iが感情を持つ日もそう遠くないのでは、とも言われています。もしもA Iが人類の知能を超え、感情をもってしまったならば、どのような未来が待ち受けているのでしょうか。人間がA Iを悪用するのではなく、A Iが自ら犯罪を起こし始めるかもしれません。もしかしたら、A Iが人間からお金をだまし取るかもしれません。生きていくのに私達人間が邪魔になって、人間を殺し始めるかもしれません。どちらもあり得ないと思います。しかし、二〇四五年問題やA Iが感情をもつことが現実になれば、そんな、今ではあり得ない未来もあり得る未来になってしまうのです。

私はそこまで進化することを望んでいません。今の「普段生活している中で、少しだけA Iの力を借りている」くらいがちょうど良いのだと私は思います。もしも、身の回りのもののほとんどがA Iになって、料理や洗濯をしてくれるようになったら、身支度をし

てくれたり、行きたいところにどんどん連れて行って
くれるようになったら、きつとすぐ便利になるでし
よう。しかし、そんな未来には、便利しかない、便利
以外何もないのです。温かさも温もりもない、ただた
だ便利なだけの冷たい世界になってしまいます。わた
しはそんなのは嫌です。人には人にしかない、温かさ
や温もりがあります。それはどう頑張ってもAIが手
に入れないものです。そんな、人間にしかない良
さをもっとみんなで探し、その素晴らしさを実感す
るべきだと私は思います。そして、人間の良さを生か
した、温かい世界を守ってほしいなと思います。

二〇四五年なんてまだまだ先のことだと思いかもし
れません。しかし、あと二十四年なんて、きつとあつ
という間に来てしまいます。だからこそ、一人一人が
今、考えなければならぬのです。

本当にAIをそこまで進化させることが重要なので
しょうか。私たちの生活を便利にすることだけが良い
ことなのでしょうか。最近の私達は、そのような、今
の自分達の利益のことばかりに目がいきすぎていて、

何か大切なものを見失ってしまったような気がし
ます。

皆さん、想像してみてください。AIが犯罪を犯す
未来を。想像してみてください。人間にしかない良
さを生かしながらAIとうまく共存していく未来を、ど
ちらが私達の目指すべき未来かは、私達が一番よく知
っているはずです。

礼儀のかけ算

甘楽町甘楽中学校

一年 井上 海翔

「お願いします。」帽子を取って、この言葉で僕の野球は始まる。グラウンドに入る時もバッターボックスに入る時も、この言葉を言う。朝は「おはようございます。」練習終わりは「ありがとうございました。」相手の目を見て、気持ちを込め、この言葉を言う。皆さんも、常日頃無意識に礼儀を大切にした言葉を発しているのではないでしょうか。

僕は小学四年生の頃に野球を始めました。野球の時はどんな時でも「あいさつ」をするように監督から言われました。グラウンドに入る時も、ノックを受ける時も、知らない人が通った時でも、何をすることもまずあいさつ。しかし、始めたばかりの僕にはそのあいさ

つは「恥ずかしいこと」でした。もちろん朝起きたら両親に「おはよう」と言います。「行ってきます」や「ただいま」も素直に言うことができませんでした。周りの人の何かしてもらったらすぐに「ありがとう」と感謝の言葉を伝えます。しかし知らない人にあいさつをすることは、当時の僕には勇気のいることでした。小さな頃から両親や祖父母からあいさつの大切さは教えられてきたため、わかっているつもりでした。それなのに自分の中に「恥ずかしい」という気持ちもありました。なぜ恥ずかしいと思うのかはわかりませんが、大きな声であいさつをすることができませんでした。

しかし、あのできごとをきっかけに、あいさつに対する意識が変わりました。一人のおばあさんが家の近くを歩いていました。僕はその時学校帰りで、小さな声で「こんにちは」と声をかけ追い抜いていきました。しかしおばあさんは耳が遠いのか、僕の声が小さすぎたのか、気づいてくれませんでした。通り越した後、おばあさんが「僕、落としたよ」と言って、僕が落とした大切なキーホルダーを拾ってくれました。僕はと

てもうれしくて、大きな声で「ありがとう。」と言いました。するとおばあさんは「こちらこそありがとう。そんなに大きなあいさつをしてくれてとってもうれしいよ。」と言ってくれました。

僕はその時、あいさつをすると自分もとてもうれしくなるのだと知りました。そして、それまでは恥ずかしい気持ちのせいで小さな声であいさつをしていましたが、それは間違っていたのだと気づきました。僕の一言で、いい気持ちになってくれる人、すがすがしい気持ちになってくれる人がいるのであれば、僕は恥ずかしがらずに大きな声であいさつをしたいと思いました。相手も喜び、そしてそれによって自分もとてもいい気持ちになる。小さい頃はわからなかったけれど、なぜ野球であいさつや礼儀をとっても大切にするのか、おばあさんのあの出来事でわかった気がしました。

やらされてやるのではなく、まずは相手を思いやる気持ちをもつことが、人としての礼儀なのだと思います。嫌々あいさつをしても、相手には届きません。野球の練習も同じで、気持ちもついてこそ野球もうまく

なるのだと気づきました。野球を始めたころに、監督がなぜあいさつや礼儀を大切にしていたのか、今、とても礼儀を大切にするボーイズリーグのチームで野球を始めて、しっかりとわかるようになりました。心からのあいさつで、あいさつをされた相手も、あの時のおばあさんのようにとても喜んでくれる。心から思うことで人に伝わる。そしてそれは自分のものになる。野球の練習も同じで、礼儀や挨拶など、心を込める部分を大切にすることで、チームワークが良くなったり、自分のプレーにより集中できたりと、気持ちとプレーはつながっているのだと感じています。

野球がうまくなりたい。ずっとそう思って練習しているけれど、ただ練習するだけではなく、あいさつや礼儀を大切にすることで、自分の努力は報われると思います。○×一〇〇〇〇〇〇です。礼儀の部分が○ならば、一〇〇回練習しても、一〇〇〇回練習しても○のままだと思います。しかし、礼儀が一でもあれば、練習した分だけ上手くなるはずです。まずは人として、礼儀をもって夢に向かって努力したいと思います。

礼儀×練習。このモットーを常に忘れず、絶対に上手くなつて夢を叶えたいです。

今、起きている問題

甘楽町甘楽中学校

一年 杉山 侑輝

「あの人コロナにかかったんだって。」「怖いから避けよう。」このような会話を聞いて、皆さんはどう感じますか。僕は、「差別」だと感じました。また、「あの病院コロナ患者がいるんだって。」「じゃあ、あの人もコロナにかかっているんじゃない？」などの、医療従事者を平気で批判するような声もあるそうです。今、本当に大変な状況で一生懸命頑張ってくれている人たちに対してひどすぎると思いませんか。

僕はこうした言葉を、あるテレビ番組の特集で聞きました。その内容は、新型コロナウイルスに感染した人にインタビューをするという内容でした。インタビューを受けた人は、「買い物に行ったら、周りの人が

らの鋭い視線を感じました。レジに並ぶと、店員さんの態度が変わったので、それ以来買い物に行くのが怖くなりました。」と話していました。

また、コロナに感染してしまった人を預かっている病院の方たちも周りの人からの冷たい言葉や態度に苦しんでいることを知りました。周りの人たちは、その病院ではコロナ患者を預かっているため、その人もコロナにかかっているのではないか、また、そうした場合に自分も感染してしまうのではないかという不安な思いが行動に出ってしまったのでしよう。

このような、周りの人たちからの言葉や行動で傷つく人をこれ以上増やさないためには、どうしたらいいのでしょうか。

まず、感染してしまった人に対しては、「コロナは誰でもかかる病気」だと思えることが重要です。自分もかかる可能性があるということをしきちんと理解し、もしも自分がかかってしまった場合を想像してみる事が大切だと思います。そうすることで、誰もがかかりたくて感染しているわけではないという意識をもち、

「かかった人は悪い」と簡単に決めつけるようなことはなくなるはずです。また、医療従事者の方に対しての差別をなくすためには、日ごろから働いている方への感謝の気持ちをもつことが大切だと思います。感染リスクの高い場所で、多くの人のために頑張ってください、という気持ちをもっていけば、平気で差別するような発言も減っていくと思います。

コロナは誰にでもかかる可能性のある病気です。だから、コロナにかかった人やその近くにいる人たちの気持ちを考えて行動することが今本当に必要になっているのだと思います。

では、もしも自分の周りの人がコロナにかかってしまった場合、どうしたらよいのでしょうか。まず大切なのは、普段通り接することだと思います。コロナにかかってしまった人は、教室や職場に戻ってくるとき、クラスの友達など周りの人が自分に対してどういう反応をするか、とても不安になっていると思います。だから、「コロナにかかってもかかってもかかっても同じ」ということをその人に伝えるために、普段と同じよう

にあいさつや会話をすればいいと思います。それでも不安そうなら、「大丈夫？」とこちらから声をかけることで、少しでも安心して過ごせるようにできたらいいと思います。

また、僕がテレビで見たように、コロナにかかった人が、周りの人たちの視線やうわさ話などで傷つく場合もあるため、その人がいない場所での会話や、自分の何気ない態度で誰かを傷つけていないか注意することも必要だと思います。

新型コロナウイルスは、今も変化を続け、完全に消えるまでにはまだまだ時間がかかりそうです。これからも手洗いや消毒などの感染予防とともに、自分の周りの人たちへの何気ない差別の予防も心がけることが必要です。皆で協力して、乗り越えていきましょう。

あなたは毎日をどう過ごす

甘楽町甘楽中学校

二年 大類 亨介

いきなりですが、皆さんは「人生の終わり」について、考えたことはありませんか。きっと多くの人は、考えたことがないでしょう。多くの人は、「自分はまだ先が長いから。」

「自分はまだ先が長いから。」
と思っただけで、思っています。私も最近までそうでした。ですが今は、ニュースで毎日のように流れてくる新型コロナウイルスによる死者数や殺人によって奪われた命のニュースを見ると自分にもあったかもしれないと思うようになり、怖くなりました。

そんなことを思っていたある日、住野よるさんの『君の臍臓をたべたい』という小説のある一説が私の脳裏によぎりました。主人公が彼女に

「残り少ない命を、やりたいことに使わないの。」
と聞きます。それに対してヒロインである彼女は、
「私も君も、もしかしたら明日死ぬかもしれないのにさ。そういう意味では私も君も変わらないよ、きっと。」
と答えます。私はこのセリフを読んだときに、まるで体に電流が走ったような衝撃を受けました。何も特別なことは書いてありません。当たり前のことを言っているだけなのです。ですが、「もしかしたら明日死ぬかもしれない」の「もしかしたら」を考えて日々を生かしている人は、とても少ないと思います。きっと多くの人は「もしかしたら」を考えてもすぐに「自分には起こらないだろう」と、他人事のように考えてしまうでしょう。でも実際には、その「もしかしたら」が起こってしまい、命を落としてしまう人がいるのです。今ニュースで流れている被害者の方々は、明日何をしようかをきつと考えていたはずですが、いつ自分に「もしかしたら」が起こるか、誰にも分からないのです。また同時に、自分以外の人達、家族や友達、恋人にもそれは起こりうることなのです。

今年の二月に、私の曾祖父が老衰により亡くなりました。その時に、私の遠い親戚が、

「成人式の服を着てあげればよかった。」

と言っていました。先ほども挙げた『君の臍臓をたべたい』では、病気による余命に關係なく通り魔によって亡くなってしまいます。照らし合わせてみると、曾祖父は、夜に眠った後にそのまま亡くなり、小説の彼女は、主人公との集合場所に行く途中に亡くなってしまいます。どちらも亡くなる前日まで、変わらない日常を過ごしていたでしょう。ですが、そんな日々に突然幕が下りてしまったのです。もちろんこれは自分にも起こりうる「もしかしたら」なのです。

日々の生活で、私たちは当たり前のように過ごしています。その一日一日をどのような思いで過ごすかによって「今日」の価値は大きく変わると思います。人生を絵本に例えてみましょう。一日を特に何も思わずただ流されるように過ごせば、今日という一ページは色のない、つまらないものになってしまうでしょう。ですが、一日を大切に、意味を持たせようとして過ご

せば、色のついた温かいページになることでしよう。このように、今日という日をどのように過ごすかによって、その一日の価値は変わってくる訳です。

人生には、はじめに述べたように「もしかしたら」が突然起こってしまうかもしれません。私たちが毎日のように言っている「また明日」は、突然なくなってしまいかもしれないのです。だからこそ、悔いが残らないように、一日一日を精一杯生きなければならぬと思います。そうすればきっと、毎日が色づき、充実したものになるでしょう。

私たちの生活は、先の見えない不安定なものです。だからこそ先ほどから述べているように、いつ「もしかしたら」が起こっても、今までの日々が充実した良いものだったと思えるように、今日、今からでも、一日に意味を持たせてみませんか。

笑顔が教えてくれたこと

甘楽町甘楽中学校

二年 堀口 杏

私の祖父は、いつも笑顔です。

私はいつも通りカレンダーに、学校が終わる時間を書いていました。それを見た祖父は、いつも何も言わずに迎えに来てくれました。私はそんな祖父に、いつも感謝をしていたのですが、ある日、祖父が突然入院してしまいました。そのときの私は、軽い病気かと思っただけで、勝手に「大丈夫だ。」と思い込んでいました。

ですが、その考えはすぐに違うと分かりました。祖父は、肺がんのステージ四と診断されたのです。入院している病院に行くときは、不安でいっぱいでしたが、祖父は、そんな私とは逆で、いつも笑顔で迎えてくれ

ました。

「辛くないのかなあ。」

と私は病院に行くたびに思っていたため、祖父に、

「なんでいつも笑顔なの。」

と聞いたところ、

「笑っていると、周りの人も笑顔になると思っているからだよ。」

と言いました。そのとき私は、

「確かに自分も、おじいちゃんが笑っていると自分もつられて笑っている気がする。」

と思いました。

その後も、祖父の病気はどんどん広がっていき、それを聞いた私は、以前よりももっと不安になりましたが、毎日欠かさずに病院にお見舞いに行っていました。怖くてあまり行きたくないと思っていたけれど、できるだけ行くことにしました。祖父は寝たきりなので、体に負担がかからないように、友達とクッションを買い、それと一緒に手紙を書いて渡しました。後から看護師さんに聞いた話だと、祖父は、私の書いた手紙を

読んでくれと頼み、聞いた祖父は涙を流したそうです。その涙はきつと、悲しいときに流す涙ではなく、うれしいときに流す涙だったに違いありません。表情には出ていませんが、きつと心の中では笑顔だったのだと思います。それを聞いたとき、とても温かい気持ちになりました。

皆さんには、大切な人がいますか。私が大切なのは、祖父、そして家族です。大切な人には、いつも笑っていてほしいですね。祖父の「笑っていると、周りの人も笑顔になる。」というあの言葉、それを改めて考えると、その通りだと思いました。笑顔には、その本人や、周りの人を楽しくさせたり、温かい気持ちにさせたりする、不思議な力があると思います。知り合いの子に、

「何でそんなに笑っているの。」
と聞かれて、

「確かに、何でだろう。」

と答え、笑顔って本当に不思議だよね、と話をしたこともあります。

笑顔は、何のためにあるのでしょうか。それはきつと、自分や周りを笑顔にさせ、心の中や雰囲気は温かくさせるものだと思います。みなさんも周りが笑顔だと、自分もつられて笑顔になったり、沈んだ気持ちも、少しは和らげられたという経験があるかと思います。私も、祖父の笑顔や、周りの笑顔に助けられたことがたくさんあります。私はこれからもずっと、笑顔を忘れずに過ごしていきたい、周りが笑顔になれるようにしていきたいです。

笑顔が教えてくれた、自分と人とを温かく包み込むということ、それは、今までの経験の中で得た、とても素敵なこと。これから先もずっと、大切にしていきたいと、私は思っています。

本の魅力

甘楽町甘楽中学校

三年 青木 柚月

「本」と聞いて、どんなイメージをもつのでしょうか。面白いと感じる人もいれば、苦手だな、と感じる人もいるでしょう。中には、そもそも興味が無いと思っ
ている人もいるのではないのでしょうか。

私が初めに本と出会ったのは、小学校一年生のときでした。授業で図書室に行きました。最初は、ワクワクしていたのですが、何分までに二冊借りなければならず、「もう、これでいいや。」と、毎回同じ本を選んでいました。そのため、「本は、つまらないもの」と感じてしまいました。小学三年生になったある日、友達に誘われて久々に図書室に行きました。休み時間に図書室に行くのは初めてでした。そこには、以前授業で入ったときには感じられなかった自由さがありま

した。時間や貸し出し数の制限はありましたが、図書室にいる人たちの楽しそうな姿を見ているうちに、私は本に興味を持つようになりました。友達にお勧めの本を教えてもらい、新しいジャンルの本を開拓していくうちに、本の楽しさ、面白さに気づき、だんだん本を好きになっていきました。

私が以前読んだ本の中で、こんな言葉があります。「人は、百年くらいしか生きられない。実際に訪れる場所も、一緒に過ごせる人にも限りがある。だけど本は、昔からずっと時間と空間を超えてきた。そこには他の世界があつて、他の生き方がある。」この言葉を讀んだとき、本の存在意義というものを教えられたような気がしました。現代のことは、実際に生活を通してしているのでわかります。しかし、私が生まれる前のことは、テレビなどでしかわかりません。そこで、本の存在が大きなものになっていくのです。文章を読むことで、間接的ではありますが、その頃のことを詳しく教えてくれるのです。それが、私が感じる本の魅力の一つです。私は、自分が生まれるより少し前の時代の

話をよく読みます。読んでいると、当時の言葉遣い、流行、暮らし方などがたくさん書かれていて、「こんなのだったのか。」と興味深くなります。

また、本にはそれぞれの世界があると思います。読んでいくたびに、さまざまな人に出会い、その人たちの考え方に触れ、年輪のように私が持っている世界観を大きく広げてくれます。普段生きているだけでは味わえないことを、本から感じることができます。つまり、新しい考え方や視点を持つことができるようになるのです。これが、私が感じる二つ目の本の魅力です。

最近、私は、戦争のことを取り上げた物語を読みました。そこで、若い人が、死を覚悟し「お国のために」と敵国の軍艦に突撃していた「特攻隊」のことを初めて知りました。その物語から、戦争の恐ろしさを感じたとともに、若いからまだ死なないだろうと思っっている今の私たちと同じ十代の人が、国を守ろうと思っ、亡くなった。そんな命がたくさんあったことを知り、とても考えさせられました。この本は、漠然と「戦争はダメだ。」と思っていた私に、「戦争は絶対しては

いけない！」ということを強く気づかせてくれました。

私は、皆さんに本を好きになってほしいです。そのために、何ができるかは難しいですが、たくさんの本を紹介して、みんなが本を好きになるきっかけづくりができればと考えています。それぞれの目線でいろいろな魅力を本から感じてほしいです。

主張するために大切なこと

甘楽町甘楽中学校

三年 岩井 唯花

「主張とは、自分の意見を言い張ることである。」
「主張」という言葉に疑問を持ち、辞書で調べると
こう書いてありました。そこで、私は「主張」について
考えてみました。

「主張」と聞くと、選挙演説のように、公の場で自
分の意見を一方的に訴えるという堅い印象を受けると
思います。ですが、私たちの日常会話の中にも、主張
する場面はたくさんあると思います。例えば、「国語
は面白い。」これは、自分の感じた意見なので主張と
いうことになります。そう考えていくと、私たちは日
常会話の中で、常に主張しているということですね。会
話の中で、お互いに主張し合っていると、価値観の違
いなどにより、「意見の相違」が起きてしまいます。

これは仕方のないことですが、このずれを少なくする
ためには、主張する側は、自分の考えを相手に押し付
けないことや話に説得力を持たせることなどが必要で
す。聞く側も、自分と違う意見を初めから否定せず、
最後まで聞いてみるのが大切です。そして、お互い
の主張を聞き合うことが大切になります。

では、SNS上ではどうでしょう？今は、自分の主
張を全世界に発信できて、とても便利です。しかしそ
の一方で、人を傷つけたり不快にさせたりしてしまう
内容を含んだ投稿が、一瞬で拡散され、批判を浴びて
しまうなんてことは日常茶飯事です。これは、自分の
顔がわからないことを良いことに、なんでも主張して
よいと勘違いしてしまうのが故に起きてしまうことだと
思います。SNSの投稿のほとんどが、文字のみで顔
の表情がわからないため感情がわかりにくいのです。そ
のため、誤解が生まれやすくトラブルも起こりやすい
です。

女子プロレスラーの木村花さんが、SNSでの誹謗
中傷により自殺してしまった事件がありました。もし、

あの時木村さんに対して言葉を選んで発信していたら、死を選択するまで傷ついたり苦しんだりはしなかったと思います。

言葉は、使い方を誤ると人の命まで奪ってしまいます。人を言葉で追い込み、死なせてしまう。そんなことは絶対にあってはならないことです。SNS上で主張する際にも、普段の会話と同じく、聞く側のことを考え、誤解されないよう気を使い、伝わりやすい言葉を選ぶことが大切です。そして、自分が発信した主張は、世界中の人々の目に触れるものであることをいつも頭に入れておくことが必要だと思います。

しかし、だからと言って、トラブルを恐れすぎて、何も言わない、主張しないというのでは、自分の考えをわかしてもらえません。主張する際は、どんな場面でも自分の意見を押し付けるのではなく、「相手に伝える。分かってもらおう。」ということを優先すべきだと思います。また、主張を聞く際も、相手の意見を無理に肯定したり否定したりせず、一旦受け入れてみるのが大切だと思います。

普段の日常生活の中で、お互いの思いを伝え合いお互いを「受け入れる」ということから始めてみてはどうでしょうか。そうすることで、一人一人の考えが尊重され、主張しやすくなり、さらには生きやすい社会になっていく。それが、理想の社会だと私は思います。

仲間と過ごした「貴重な時間」

甘楽町甘楽中学校

三年 金井 俐樹

主審の合図とともに、「さ、行くぞ！」とポジションへ駆け出していきました。これが、全国中学生硬式野球大会の幕開けでした。振り返ると、泥沼にはまり込んだチームをみんなで立て直し、苦難を乗り越えてやっとこの舞台にたどり着いた。そう実感した瞬間でもありません。

僕たちのチームは、昨年秋に全国大会出場の切符を手にかけることができました。しかし、そのことで僕たちの中に自惚れやおごりが生んでしまい、気の抜けた練習をする日が続きました。

その結果、三月から始まった練習試合は散々なもので酷い有様でした。簡単な打球をエラーする。投手陣は粘れず大量失点を許す。選手の怪我のための離脱。覇気のないプレーの連続。試合をやっている恥ずかし

くなるほどでした。僕は、「こんなんじゃない。」と思いましたが、「キャプテンとしてどうすれば、何ができる？」答えを見つけられずにいました。そんなある日、後ろを振り返り練習している仲間を見たとき。「一人じゃない。」とつぶやいていました。「そうだ、一人じゃないんだ！」その瞬間「みんな集まって。」とみんなに声をかけました。自分の思いを伝えるとみんな同じことを考えていました。このままではいけないことを。それから、みんな話合い、意見をぶつけ合い迷路の出口を探し続けました。その日から、僕たちのチームは潜水艦が海上に浮かび上がるように上昇していきました。このみんなで悩み苦しんだ時間は、「このメンバーなら行ける」と僕に確信させてくれた貴重な時間でした。

大会初戦は、大阪代表のチームとの戦いでした。見事初戦突破した僕たちはホテルでのミーティングで試合の振り返りをしました。そこで、チームの課題、個々の課題を出し合いました。時には笑い、時には真剣に話し合う中で、去年よりも絆が強くなったのを感じ

ました。二回戦、沖縄代表の強豪チームとの一戦でした。初回相手の強力打線によりに失点し、ベンチに戻る時でした。「大丈夫、大丈夫。まだ初回。」とスタンドから声がしました。僕たち全員がスタンドに目をやると、ベンチに入れなかった三年生の四人が、僕たちに声をかけてくれたのです。円陣を組みながらみんな目を合わせ、無言で頷き、「ベンチに入れなかった仲間のためにも頑張ろう」と誓いました。その声援のおかげで逆転勝利しました。試合後のグラウンド整備を終え、一目散にスタンドの四人のところに向かいました。そして、笑顔でお互いを讃え合いました。その時、改めて四人の気持ちを感じることができました。「本当は、一緒にグラウンドに立ち戦いたかったろう。」そんな気持ちだが、勝利の喜びから明日の勝利への誓いに変わったのです。今思うと、チームを勢いづけた「貴重な時間」と言えます。その勢いに乗り僕たちは、準々決勝、準決勝を勝ち抜き、決勝へと進みました。決勝は、お互い譲らぬ攻防を続けていききましたが、太陽の光が目に入り、エラーで逆転を許し、準

優勝に終わりました。目の前で、相手チームが人差し指を天にあげ喜んでいました。ふと見ると、エラーをしてしまった仲間が下を向き落ち込んでいました。僕が歩み寄り、「僕たちの力が足りなかったんだよ。」と声をかけると、また一人また一人とその仲間のところに集まり声を掛け合いました。そして、みんなが笑顔を取り戻し、僕たちの全国大会は幕を閉じました。

仲間と過ごした「貴重な時間」とは、時間や思い出だけではなく、チームの原動力、仲間との絆、そしてなにより目標達成を掴み取るための大切なものだと感じました。状況や環境で形や内容は変化しますが、これからもたくさんの「貴重な時間」を感じながら、仲間など大切な人たちと過ごせる人生にしていきたいと思えます。

